

ミオヤの光



敬愛の巻

幼君を即位せしめよ

彌陀の光明は實に是れ人の精神をして現在を通じて永遠に活かす靈力なり。現在より精神的に眞の幸福と光榮とを與へ、而してすべての活動に無限の力を與へ給ふ靈徳なり。

あなたの御頭の中臺の玉座に在ます靈性はもと大ミオヤの王子に在ませども未だ幼にして全身心を征服し統御する權威を得給はざるなり。されば宇宙の大ミオヤの光明を被むりて幼君をして即位せしめて全身心を統率してミオヤの光明の下に自己の使命を果すべく無限の力を與へらるゝやうに常に聖名を稱へて祈り給へ。

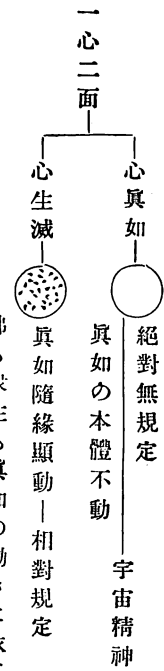
起信論

聽書 (7)

一に顯示正義とは正しく所立の大乗の法義を釋す。
 二に對治邪執とは宇宙萬物の體は何に依つて擔保し作用する。今日の科學で云へば、物質原子があり、其で成立して居ると云ふ様な邪執を對治し。
 三分別發趣道相とは邪執既に亡す次に趣正の階降を辨す、故に分別發趣道相有初に眞如の理は如是者と學說に依てみとめた上に眞如の理に依つて働き得る彌陀同體に成るべき爲に斯様に眞如の中に入つて眞如の理にかなつて活く。世間哲學は眞如は斯々なりと學說に依つて説明する計り、佛教は前說の上に斯様に彌陀同體と成るべき者

と眞如を説明する。

四



象
 本體なきに現象することなし。因縁因果の約束の母あればこそ子あり、譬へば太陽を離れて地球なきが如し。

一法界とは如理虚融平等不二なるが故に稱して一とす。

一切の法則を軌持する體 無差別相故 一切法門

法體其の者を指し大總相法門の體といふ。

心性とは即ち本體なり。心如來藏、謂く忘に隨に不生約治不滅又修起不生處染不滅故攝論云世間不破出世間不盡故

妄念とは水の波の様なもの迷に依つて現はるものなり。

一切諸法とは下末二三三云一切法本來唯心

離心念とは十五右心體離念

一切境界之相とは言説名字緣相

執者の云現に諸法を見るに差別遷流す云何ぞ乃ち言性無生滅釋云差別の相は是汝が偏計妄情の所作なり。本來無實如下依病眼妄見空華故云皆依妄念而有差別疑者又云以何得知依妄念生釋云以諸聖人離妄念故既無此境即驗此境定めて從妄生。又若此境非妄所作一定實有者聖人應不見是迷倒凡夫既見應是覺悟如不見空華應是病眼返詰準之故云若離於念則無等

五

是故とは是の前の所執本より空なるが故に眞心不動故由一切諸法皆即ち眞如なり。

六

離言說相とは非在言說音聲中

離名字とは非在文句詮表中故に此二句言語路絶す非聞慧境相對には名字あり。

離心縁とは意言の分別に非ざるが故に心行處滅す。思慧の境に非ず上來僞妄を離るゝが故に眞と名づく。自下異相を離るゝが故に如と名づく。又下の三句展轉して相釋す。世間修慧の境を離れて唯だ正智と與に相應す。即ち能念所念を〇〇其の心縁を離れて

言畢竟平等とは染淨に徧通すと雖も性恆に無二なるが故なり。所以得無二以狂縁時始終不改故云無有變異也所以狂有爲中得と不變異者以不同有爲可破壞故此則狂染不破治道不壞也。

眞如は時間に不變 空間に平等 本體に歸すれば一心なり。

相とは對待するが故に相あるなり。

唯是一心とは諸法既に無故に唯心在如萬像本空唯是一境結歸法體故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

故名眞如依義立名於一心上有上諸義故名眞如。

謙遜す。然る時は尊敬は敬深ければ深きに随つて距離が大きくなる。宗教上の愛慕の情は其反待に如來を愛慕憶念して益す濃厚なるに随つて益々接近し相抱擁して融合の状態に到らざれば止まぬ。敬は昵み近づかず愛は親みて遠ざけず。

此兩の心的活動は反待にして一は昵ます一は離れずして反待にして而も兩者は宗教上の好一對の心的活動にして左と右との如く相待にて完き宗教心を成す。如來は絶對無上尊にして無上の尊敬を拂ふほかまた如來を愛樂する情は進むなり。然れども世に敬有つて愛なきあり愛して敬せざるありまた敬愛共に行はるあり、宗教心は愛と敬と共に活動して始めて眞の價ある宗教心となる。

光は心靈を愛育し給ふ力

吾人の常恒に内觀的本尊と爲つて吾人の信仰の對象として常に吾人の宗教心を導き玉ふ者は宇宙唯一の彌陀尊にて在ます。吾人が宇宙の中心本尊は無限の光にて永恒の生命なる無上尊なり。

如來は神聖と正義と恩寵との靈徳を以て常に吾人の頂を照らし玉ふ。神聖に對して吾人は眞に威神光明侵すべからざる感あり。是吾人の尊崇性を照して歸命頂禮せしめ玉ふ。威力あることを信ず。吾人は神聖なる智慧の照鑑の光にて正知見を興へられて、如來の聖意を以て吾人の意志とし、吾人の神聖の光明の中の行爲は

恭敬と愛慕

如來を無上尊と尊崇し常に如來を愛慕して止まざる信念の心理には相反せる二つの心理が活動してをる。如來に對する敬と愛である。

吾人はいかに考ふるも宇宙間に絶對的に尊崇して眞實に無上の敬恭を捧ぐべき對象は唯一である。此は絶對的の尊なるを以て他のすべてに比すべきものはない。尊崇性を以て如來を、無上尊を恭敬する時は尊敬は如來と吾人の間をなれ近づくことを免るさず。尊敬は益す進むに随つて如來は高きにつきて尊み自己を卑下して

如來に向うて、眞善美の極致に向つて進趣することを得。正義は如來の聖意は惡を捨て善を選び邪を捨て正に歸し非を避け善に就かしむる勢力なり。故に吾人が此靈性に照らさるゝ時は自然と聖意の如くに如實に如來の聖道に進むことを得。

恩寵としての如來は慈父や慈母のその子に於ける如く無上の慈悲を以て吾人を愛攝し玉ふ。此靈徳に對する時は實に有りがたく感じられまたいとあたゝかなる慈愛に抱擁せられて自づと如來の愛に融合す。此靈徳は吾人の心靈を愛育し玉ふ力なり。

我等が信仰する如來は吾人が最も尊崇すべくまた最も愛慕すべき人格的神尊なり、如來正義（威神の光）を以て吾人に儼臨し玉ふ方より見れば最も尊敬すべく實に如來は神聖にして侵すべからず。吾人は如來の神聖なる光の宇宙間一切の尊き格上よりも尊く絶對的に尊きを感じず。こゝに於て吾等が眞面目なる宗教心は絶對的神尊の如來に對する尊崇心に依て成立す。如來は我らが最も愛慕すべき人格尊なりと感ず如來は恩寵を以て我等衆生を愛し玉ふこと母の子を思ふよりも甚だし我等が心靈の佛性は元より佛の子なりまた佛の子たる靈性は只如來を愛慕し憶念する信仰に由てのみ育つなり。

恩寵發得

恩寵發得とは三昧發得ともまた靈性開展とも聖靈感得とも種々に名けらるゝも歸する處神人合一の實致にして靈の生命に入るの事實なり。如來の恩寵によりて自己の靈性を發き心光を自己の物とするにあり。假令宗教の意義を理解する共全く發得するに至らざれば活ける信仰と云ふ可からず。

恩寵發得の因縁は自己の信仰を因とし如來の恩寵を縁とし因縁成熟する處に於て初めて恩寵を發得す。喩ば木は燃て火を發す可き性を有するも、或は他の木と木と摩擦して火を發するか亦は他の木に燃つゝある火より傳はりて自己火を發するかの如し。就ては恩寵發得の規定に先づ因なる自己の性の信仰と如來の恩寵の關係を研究せんに人の性には如來の恩寵を獲得すべき性が本能に具備せり。如來の光明の縁によれば受得らるゝ性を因と爲。また宇宙の法界には人の信仰に對して絶對なる力を與ふべき勢力あり。之を恩寵といふ。宗教上の靈的關係を更に喩を以て例せば人に目あり外に日光あり目と日光の因縁によりて能く物を見うるが如しとの華嚴の説の如く、假令日光は常より照せども目なき時は視ること能はず。自然界の太陽に例ふべき心靈界の如來の光明は常恒に照耀しつゝあるも、信仰の眼まだ開けざれば此靈的光明を意識

するに由なし。信仰の心眼開けて如來靈光の中に精神生活を爲すに至れば凡て天地萬物若しは自然界の方面も靈界に通して現在より永遠に貫きて悉く如來の恩寵にあらざるは無きことを實感するに至るこれを恩寵の發得と爲す。

恩寵發得の規定に因と縁との理を明さば、

因即ち人の信仰心に如來の光明を得らるべき性ありて此の因性に二種あり遠因と近因なり。遠因とは一切衆生の本性本一大法身の分子なれば原始的生物の源より靈性の伏能を具有すと云も敢て不可ならざらん。之を佛教に一切衆生悉有佛性と示さる。此靈性具備すれども潜伏態にして直に顯動態を爲すにあらず。衆生の遠因佛性は平等なるもこの佛性を開發す可き如來の恩寵を發得するには精神が高等に進化しての後になるべし。近因とは人の靈性が豊富にして如來の恩寵を發得するに適當なると不適當なるとの二素質あり。靈性豊富即ち宗教的天才とも云ふべきものは自然に宗教信仰に感じ易く亦自から天の一方に靈光を憧憬し靈的信念の自己より衝動するものなり。或はまた一向鈍愚にしていかに他より施すも信仰の起らざる機類あり。また世智辨聰にて世智は通常に超て利智なるも靈的信仰には心に感じ難きあり。

此ら其稟性の殊なるは或は佛教にて宿因と云ひ世間に遺傳素質と云ふ宿因と見做すも遺傳素質と云ふも人の性に宗教に適不適

あるは事實なり。各自の先天的に宗教的素質の豊否はあれども人間として全く遺傳素質的の信心性能無きはあらざるべし。近因なる祖先來の遺傳恩寵が因として人には宗教の信仰を發得出來たるものとし之を因と爲す。

如來の恩寵即ち一大靈力また本願力とも攝取の大光明とも云ふ名は種々にあれども要する處人の信仰心を救けて満足にし啓示し悟らせ苦を抜き樂を興え惡をさけ榮に向しめ闇黒より光明に不満足より満足に不靈より靈的に卑劣より高尚に有限より無限に人の信仰を滿しむる靈力の存在もまた當人の經驗に訴へて證する處なり。之を如來の恩寵と爲す。教祖釋尊の靈に滿てる精神狀態聖法然の圓滿なる靈的生命彼の聖者等の信仰心に滿ちしむる者即ち是如來の恩寵なりまた心光なり。

例は月には光なし然れども太陽の光に反映して皎々として照如く彼の聖者の人格に如來の靈光の反映して心靈皎々として靈光を放ちしに非ずや。宇宙に斯の如きの一大靈光また恩寵の赫々として照耀せるは實に百倍の日月の雙照よりは明かなり。斯の如きの靈光は常恒に照るも之を知りて斯靈光を以て自己の生命として靈的生活するには斯光明の靈力を被りて靈性發得するにあらざれば悉く自己の靈を爲す能はず。

靈光を受くる人の信仰即ち因に二因ある如く大靈力の恩寵もま

た三縁あり。大より云はゞ一無縁。二法縁。三衆生縁の慈なり。初め無縁の慈とは本有法身常恒無量光より無始無終常恒に十方界に照曜する永遠のロゴス、十方三世に亘りて微毫も其の靈力の満ざる限なし。特に彼佛光明無量にして十方の國を照すに障礙する處なし故に阿彌陀と名く。また無量壽佛光明顯赫にして十方を照耀す諸佛の國土に聞へざる處なしと云々。

如來第一義の恩寵は絶對にして規定なく一切の處とて縁せざる處なし故に無縁の慈と云ふ。無縁とは規定なく自然に一切に縁せざる處なき故に無縁と云ふ。積極的の無規定に一切に縁する處なり。如來第一義絶對本有の一大靈力法界に充滿すれども因縁に規定せらるゝ世界の方面に約束せらるゝ衆生の爲には第二義の規定によりて被らしめざれば恩寵を得ること能はず、そこで絶對本有の無量光より世界衆生の爲に遠くば法藏因位の大願を起し迷子を憐む慈悲より、因果の規定に約束せられて六道生死に流轉する衆生の爲には同じく因果の法則に準じ衆生の贖罪に無量劫の苦患を受けても忍で悔ひじとの願成就して正覺果滿の十劫正覺と顯はれしは即ち衆生の爲の報佛として光明十方を照し其本願の名號によりて如來を便り恩寵を被むる者は悉く攝取同化の縁に預らざるはなし。

近くは釋迦と現はれて如來慈父の恩寵を衆生に示さん爲佛法を

開きて大悲の恩寵を衆生に教ゆ。

十劫正覺のミダ伽耶成道の釋迦の佛法は此の因果的にある衆生を因果にかなふ法則を以て衆生を救済するの恩寵なり。此の世に佛法とし如來慈悲の教として世に行はるゝは即ち法縁の慈悲なり法縁の慈悲として顯はるゝも其本體は同じく絶對無縁の一大靈力の流行力をミダ釋迦として世に出でゝ衆生を攝取して慈父に歸せしめん爲の法縁なり。第二義は第一義より劣等なりと謂ふべからず如來には第一義と二義との別あるに非ずして第一義のみでは衆生に縁すること能はず依て因果の法則にかなふ理を以て衆生に慈悲を被らしむるのみ。

第三義衆生縁とは第一絶對の恩寵が因果律の世界即ち人間界に人佛出でて佛法といふ法縁を以て衆生を攝し此法によりて初めて慈悲如來の恩寵を被らしむる法は世に行はれるも個人個人は衆生縁によりて恩寵を被らしむるに至る。之れは佛法は世に流布すとも或は家庭に於て父母親友の誘導によりまたは教會に於て知識の親化によりて教へられ感得せられて自己に恩寵を發得す之衆生縁の恩寵と云ふ。衆生縁亦た一大恩寵が原動力なれども佛法として代世に行はれるものが展轉して甲より乙に父より子に師より資に傳燈して世に行はるゝなり。甲の燭火を乙に點じて展轉することなり。然れども火の本體は宇宙に存在する火大なりその如くに絶

對本然の一大靈力たる恩龍は常恒不變なれども衆生の信仰心に感傳して恩龍は其人の心靈的生命となりて光明的の生活をなすには因縁成熟するにあらざれば發得し難し。

恩龍發得の二緣

宗教に正義の宗教と慈悲の宗教の二種あり。西洋にて猶太教と基督教甲は正義により乙は神の慈愛に本づき甲は神の戒律を守り乙は神の慈愛を本とするが如し。

佛敎もまた此と同じく釋迦敎は戒律を基本とし彌陀敎は信敎を宗とす。

佛敎戒律主義は此土出世の釋尊より波羅提木叉即ち戒體が師より資に傳はり之を如來の法身とし假令釋尊入滅すとも法身の戒體は常住にして展轉して行はれ法身の惠命は竟に滅せず。波羅提木叉即ち戒體法身は眞實に發得して初めて眞實の活る慧命となるなり。活る佛者佛徒なり佛弟子なり。たとひ三衣身を裝ふも戒體法身發得するに非ざれば眞の佛徒に非ず。

戒に大小ありと雖も戒定慧を以て慧命とせざるなし。戒を得れば定慧も發得す。故に戒體法身の發得は基敎の聖靈感得、禪の見性と同じく靈の眞生命に入るの機關なり。

戒體の發得に二規定あり。律の文に云く一には傳燈相續發得と

二に自誓得戒となり。傳燈師に依りて相續するは即ち甲の火を乙の燭に傳ふ如くに展轉傳燈して相續す。然るに此規定にも資弟の機已に熟して師の靈格に存在する靈活生命を資弟に傳燈す。故に師は親切篤實にして資の戒體を發得せしむべし。然らざれば發得し易すからず。

次に自誓得戒とは若し百里千里の中に傳燈の師なき時自から一心に誓を起して若七日乃至七々日若し一年三年に加行修得して或は佛の相好を感見し又は花を見光明を感する等の靈感を得れば之自ら誓て戒體を發得すべし。

自誓傳燈發得何にても全く戒體發得して眞の靈的生命となる時は功に於て同じきものと爲る。

慈悲を宗とする信仰の恩龍發得にまた二類あり。一は傳燈的發得二は自修的發得。傳燈的發得は師友善智識の指導の下に漸々に信念を養はる。

人の信念を養ふ恩龍が靈を養ふことを小兒を養ふに例せば小兒の體を養ふ養分原料は日本なれば米または肉類等よりの滋養を攝取して此肉體を養ふ。然れども小兒には穀肉等が眞に自から消化するの營養機能未だ發達せず故に母が食して嬰兒の消化に適ふべき乳汁として與ふ。小兒は乳に出で養はる。然れども或時期に至れば自から穀肉等の養分を直接に攝取して營養と爲すことをうる

如し。靈的發得の規定もまた同じく師友善知識は常に自から恩寵の靈食を享受しまた信念の生命を保存す。自己の靈的信念を初心の求道者に感傳す。其の成熟に遲速の異ありと雖も求道者の至誠熱誠と師友の親切と相待つて全からば母の乳に依て養はるる兒の如くに靈的生命を發得することを得可し。此の感傳の規定に於て注意す可き事は若し師たる者單に言語文字の解説を傳ふ時は資もまた唯言説の領解のみを以てついに靈活生命ある信念を發得すること能はず故に求道者は名師を撰ぶの要あり。

斯の如きの規定によりて發得するを傳燈的發得と云ふ。次に自修發得とは自習得戒と同じく傳燈の師を待たず自修的に如來の恩寵を發得す。こは宗教的天才の如きは自己に靈的伏能より萌發せんとしつゝある資にて善導大師の如き淨土の變相を見て猛然として奮起し若し神を斯る淨域に遷さざれば何に由つてか生死を脱せんと即ち淨土の變相を見て導師の心には欽慕の念禁じ難く如來の聖言は忘れ難く自己内心にミダを念し憶念常に止すついに自から發得したるが如く、宗教的天才はたとひ縁を藉ると雖も他の師友の指導を待たずして自から發得するものなり。また自修發得と云ふも推剛勉力せざるべからず。自修的發得の機類は喩ば木と木と相摩擦して木より火を發するが如く他受的傳燈的發得の人は他の火を自己に傳ふるが如し。

何にしても全く恩寵が自己の生命となりて靈的生活に至らば足りぬべし。

かくまでにみめぐみふかき大ミオヤに

子はいかにしてつかへまつらむ

昭和八年九月二十五日 印刷
昭和八年九月二十八日 發行 (誌代年壹圓)

編輯兼 發行人 山崎 辨成
印刷人 小林 七太郎
印刷所 小石川區關口町六十五番地
小石川區關口町六十五番地
靜文社印刷所
電話牛込五四一九番

東京市小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替口座東京六八五一番